フェローシップ・ニュース
№82

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域
アディクション研究所

発行日
2017年5月1日

タイDARSに参加して

事務局長　尾田真言

1　タイDARSについて

３月21日(火)～24(金)、タイのバンコクから飛行機で1時間のラオス国境に近い場所にあるコンケン(Khon Kaen)に滞在し、22、23日の２日間は第17回DARS、24日はコンケンの薬物専門刑務所と薬物専門病院を参観してきた。

タイダースの会場にて記念撮影

DARSは「Drug Addiction Recovery Support」の略で、10年前から京都の龍谷大学の石塚伸一教授を代表として、薬物依存対策を改革しようと志す12人のメンバーで始めた活動で、国内では札幌から沖縄まで全15回研修会を開催してきた。海外では一昨年のソウルに続く2回目の開催である。コンケンにあるタンヤラック病院の会議室を会場に、日本側の講師は講義した順に、石塚伸一教授、私、髙橋洋平弁護士（東京弁護士会）、市川岳仁（三重ダルク責任者）、加藤武士（木津川ダルク責任者）、嶋根卓也（国立精神・神経研究医療センター）、長谷川直実（精神科医）、三重ダルクスタッフ・入寮者による模擬ミーティング、ネパールの薬物依存症リハビリ施設責任者のスーヤス・ラジバンダリ氏。タイ側の講師は、マヒドン大学のプラパプン・チャウロエン先生、タンヤラック病院の医師、スタッフ、保護観察官ら。参加者は延べ50名程度であった。

私の講義内容は、日本では刑の一部執行猶予制度が平成28年6月1日に施行されたが、薬物依存症治療を義務づけるものではなく、保護観察所のプログラム及び保護観察所に併設されている自立更生促進センター及び就業支援センター（合計４施設）以外のプログラムについては、保護観察対象者の意に反しないことを確認しない限り実施できないことになっている点で（更生保護法第65条の３第２項）、薬物依存症治療を義務づけるものとはなっておらず、不十分であるという話をした。

いくら裁判中に出所後ダルクに行く意志を表明して、それが評価されて刑の一部が猶予された場合でも、後にダルクには行きたくないと主張すると行かないで済んでしまっている。さらに、プログラムは全員同じものが刑務所においては12回、保護観察所においては６か月以上の仮釈放期間がある者に対してのみ５回提供され、その後満期まで月１回のアフターフォローがなされるにとどまっている。

この点タイでは2002年の薬物乱用者更生法により、ドラッグ・ユーザーは犯罪者であると同時に患者であるということで、末端ユーザーを刑務所に入れない代わりに社会内処遇にするという方針転換がはかられている。

タイでは初犯者に対しても保護観察がつけられる。保護観察は監視ではなく見守るのが仕事だという意識でやっているという。保護観察官は薬物事犯者に対して、犯罪としてではなく、時と場合にあったリハビリ主体の教育を行うことが大事だと考えて、多機関連携でこのミッションを遂行している。対象者の家に訪問して観察するアウトリーチも積極的に行っている。日本型の保護司制度もあり、英米型の判決前調査制度もあって保護観察官が調査の任に当たっている。

タイでは何よりも対象者一人一人に必要なプログラムを提供することが大切だとされ、初犯の薬物自己使用事犯者に対しても日本のように単純執行猶予でそのまま釈放されるようなことはなく、最初から薬物への依存度に応じたプログラムが提供されているのが素晴らしいと思った。

ＡＰＡＲＩとは、アジア太平洋地域アディクション研究所（Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMAC等の社会復帰施設、福祉・教育・医療・司法機関と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

タイDARSに参加して･･･尾田真言	1
ほほえみの国より、プラパプン教授をお迎えして･･･森村たまき	4
家族教室参加者からのメッセージ･･･奈良	5
ダルク入寮者からのメッセージ･･･コウジ	6
ソウルダルクフォーラムのご案内！	7
司法サポートのご案内 家族教室スケジュール	8

コンケン中央刑務所玄関前

2　コンケン中央刑務所（Khon Kaen Central Prison）

DARSセミナー終了翌日３月24日（金）、コンケン中央刑務所を参観した。刑務所入り口には日本語で「いらっしゃいませ」と書かれ、桜の花が散りばめられたピンク色の大横断幕が掲げられ、DARS一行を大歓迎してくれた。所内は南国の日差しが照りかがやき、建物や設備の色彩もカラフルで、明るい印象である。所内を自分で撮影することは禁じられたが、所員の方にカメラを渡すと代わりにどんどん撮影してくださり、かなりの枚数を記録することができた。

日課は以下の通り

06:00　起床
07:00　シャワー
08:00　朝礼、その後運動
08:30～10:00　ミーティング
13:00　グループ
15:30　シャワー
16:30　部屋に戻る
21:00　就寝

タイ側のDARS参加者

以下は説明を受けた内容の概略である。

タイには143の刑務所があり、全受刑者数は約30万人。そのうち薬物事犯者のリハビリを行っている刑務所は約10施設あり、コンケン中央刑務所もその一つである。コンケンには26の郡があるが、そのうち12の郡を収容対象とする。定員900人だが、参観時には1305人と、だいぶ過剰拘禁であった。未決拘禁者も収容し、被収容者の２０％は未決である。受刑者の中心は25～30才で、とにかく若い。執行刑10年以下を収容しているが、主に６か月から５年である。建物は築30年。１ユニットは100名で、100名が約100㎡の室内に雑魚寝する。室内には薄い敷き毛布と掛け毛布が折りたたまれて整然と並んでいた。トイレは居室内に二つあり、新入者はトイレ近くに追いやられるそうだ。個人のスペースはほとんどなく、私物はほぼ持ち込めない。清掃は行き届いており、異臭も感じられなかった。これほど大人数が狭いスペースで生活しているにしては清潔感がある。

受刑者から選別されたリーダーたち

20年前からＴＣ（治療共同体）プログラムが始まっている。参加者は250名。職員は70名で、そのうち受刑者の世話をする職員は45名、医療スタッフは3名しかいない。これでは1300名の受刑者の処遇が行えないので、受刑者の中からリーダーを選別して仕事をさせている。赤シャツのリーダー１名、緑シャツのリーダー３名、ピンクシャツのリーダー２名、青シャツのリーダー３名の顔写真入りの組織図が掲示されていた。他に月に数回、近隣の病院から医師が診察に来る。メディカルスタッフ(ナース）は3名(男１名、女２名）で、月２回県立病院の医師が来ることになっている。

この刑務所はTCプログラムの専門施設と言われている。規律も他の刑務所ほど厳しくないという。２４の規則があり、TCプログラムで瞑想などをすることで規律を守るようになる。１カ月程度の瞑想プログラムコースもあり、仏教的活動も行われている。TCプログラムの期間は4か月。最終回近くになると、家族と一緒に行う親への贖罪プログラムもあり、出所前の受刑者は親への感謝を込めて親の「足を洗う」のだそうだ。

未決で勾留されている人たちに弁護士が裁判の心構えを講義している様子

刑務所内の喫煙は喫煙場所のみで許されているが、それ以外の場所で吸うと200バーツの罰金（１バーツは約３円）、支払えなければ腕立て伏せなどの罰が科される。規則違反者は、最初は１対１で助言される。改善されなければ次は３人から注意される。それでもだめなら５人から注意される。それでもだめなら部屋全員でその一人が注意される。注意、指導されることで受刑者は自分自身を見つめ直せるようになる。態度や行動がよくなっていけばリーダーへの昇格の可能性もある。リーダーになると面会回数が増えたり、食事がよくなったりする。

出所については、刑期の3分の１が経過した時点で、より開放的な刑務所に移送されることもある。刑の期間によって刑務所が変わる。刑期を３分の１過ぎたら、仮釈放の可能性が出てくるが、日本と同様、執行刑期の80％くらいで仮釈放になっている。刑期が国王の恩赦で軽くなることもある。驚いたことに、出所後１年以内に再犯して刑務所に戻ってくる者の数が５％を超えると、刑務所長がクビになるのだそうだ。

この他、月に1回、刑務所職員との１対１の面談があり、身体のことから正月の帰省（正月は自宅に帰ることのできる者もいる）まで様々な相談を受けている。その他、大学進学制度もあり、通信講座で学んで、テストも大学から職員が出張して刑務所で受けられるようになっている。

職業訓練は75日以内で実施されている。食用コオロギ飼育、ポップコーン作り、清掃作業、その他に、電線を張る作業、調理実習、車両の修理等がある。

またタンヤラック病院と共同の活動もある。イベントや弁護士など外部講師のレクチャーもあり、我々の参観中も穏やかな風貌の弁護士が若いTC参加者たちに講義していた。

コンケンはタイの北部

３　タンヤラック・コンケン病院（Thanyarak Khonkaen Hospital）

DARS会場となったタンヤラック病院は1967年に創設された薬物依存者のための非営利の病院で、タイ全国に７か所ある。名付け親はラマ９世。タイにおける麻薬売買の中心地は、ミャンマー国境とラオス国境の２か所である。現在ラオスの患者も来ているが、メディカル・ツーリズムとして、将来はアジアの患者を受け入れることも計画中だという。

薬物依存者がリハビリに来るルートは①任意入院、②刑罰を科された者、③症状が悪化して強制入院となった者の３ルートである。

１５才から５９才の人口は4317万1282人であるが、そのうち15％に精神疾患があり、5.38％がアルコール依存だという。前出の2002年薬物乱用者更生法により、麻薬依存者には刑罰は科せられず、患者として扱われるようになった。麻薬ユーザーは使用者、乱用者、依存者の３つのランクに分類される。解毒期間は薬物の種類によって異なり、覚醒剤は１週間、アルコールは２～４週間、ヘロインは４週間である。その後120日のリハビリテーションが始まる。強制入院患者の割合は95％で、任意入院は５％にとどまっている。

DARS開催中提供された昼食

2012年に治療を受けている薬物依存症患者数は全国で35万5545人だったが、その後減少を続け、2016年には11万4882人になった。2012年までは法律で治療を受けるか刑務所に入るかを選べる時期だったので多かったものと思われる。１回でも薬物依存で外来に来た人はオンラインで登録しないといけなくなった。ただし限られている人しかアクセスできない情報として保護されている。強制入院患者は、まず警察に規制薬物使用あるいは所持で逮捕され、委員会で市町村の病院あるいはタンヤラック病院に連れてこられる。ヤーバー（覚せい剤錠剤。主に吸引で使用される）の所持量が５錠未満だと強制的にリハビリテーションに参加させられるが、５錠以上の場合は密売の可能性があるということで刑務所で服役することになる。

タイ政府は依存症問題を最重視しており、日本とは異なり、依存症治療の道を選ぶ精神科医の数は非常に多いのだという。驚いたことに、タイの大学ではすべての医学部学生が３年次に依存症治療を学ばなければならず、さらに精神科医になるためには必ず１カ月以上、依存症専門病院での研修が必修だそうだ。すべての医師が依存症に関する知識と高い意識を持っているということだ。非常にうらやましく思った。

保護観察官

またタイではハーブやタイマッサージを代替療法として用いている。歌を歌うことも呼吸を整える効果があるし、歩くことも大切、すべてがセラピーである。またビタミンB欠乏症が多いので食事からとるように指導している。一つの方法にこだわらず、一人一人に合ったものをどんどん取り入れていこうという柔軟な姿勢に好感が持てた。

本病院は、200床。TCユニットには男性80名、女性40名いる。医療費はバットンという政府の健康保険制度を活用し、ほかの病院からの紹介状があれば治療費は無料という。入院費用は１日1000バーツ、通院は１回500バーツ。TCには４か月で７万2000バーツかかるが政府が支払ってくれる。

セミナー終了後、滞在最終日に病院内を案内してもらったが、敷地は広く、木陰に置かれたテーブルや椅子で談笑する入院患者の姿もあり、広い運動場やよく手入れされた農園、キノコ栽培施設など、非常に明るい印象を受けた。女性入院患者がプログラムの一環で製作したバッグなどの手芸品も陳列されており、日本からの参加者にはお土産に手作りのキーホルダーがプレゼントされた。

ほほえみの国より、プラパプン教授をお迎えして

嘱託研究員　森村　たまき

アパリにて
一番左がプロパプン先生

４月17日、タイのマヒドン大学ASEAN健康増進研究所アディクション研究修士課程所長、プラパプン・チャウロエン先生が来日され、アパリと日本ダルクを訪問されました。マヒドン大学といえばタイのナンバーワン大学ですが、上記研究所は東アジアで唯一、アディクション学で修士号が取得できる大学院です。その研究所長を務めるプラパプン先生は神経科学がご専門で、アディクション分野における第一人者として政府機関の委員を務め、アディクション関連国際会議には政府代表として出席されるなど、常に第一線で勢力的に活躍されているスーパーウーマンです。

アパリの尾田事務局長、木津川ダルクの加藤武士、髙橋洋平弁護士、森村は、３月21日から23日まで、タイ国コーンケン市タニャラク病院にて開催されたDARSセミナーに参加、報告をしてきました。このセミナー開催にあたり、プラパプン先生にはそれはもう大変お世話になったのです。

そのプラパプン先生が家族旅行を兼ねて初めて来日され、日本のアディクション関連施設と大学を訪問されるというので、DARSとアパリを挙げての大歓迎となりました。

日本ダルクの
エイサープログラムの見学

77歳のお母様から小学生の坊やを含む総勢9名の先生御一行は、15日夜に関西空港にご到着。ワゴン車二台で駆けつけた加藤氏、神戸ダルクの梅田靖規氏に歓迎されて大阪の宿に落ち着かれました。翌日市内観光後、先生お一人は東京に向かわれ、東京駅新幹線ホームにて尾田、森村と再会を果たした後、アパリを訪問していただきました。先生はアパリのフィリピン・プロジェクトにも大変関心を持たれ、アジア太平洋のアディクション研究所として、今後研究協力を進めることで合意しました。日本ダルクでは近藤恒夫代表と面会し、アパリクリニックのリハビリの様子もご参観いただきました。

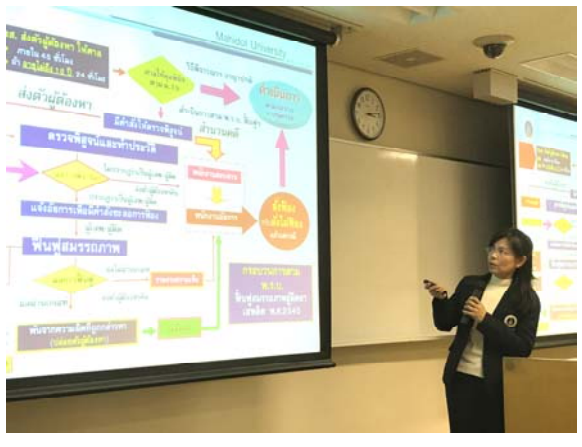
翌日午前中はフリーということで、森村が浅草・スカイツリー観光にご案内しました。タイはお正月休みの一年で一番長い休暇中なのだそうで、浅草寺のインバウンド観光客の大混雑の中にもタイの方が沢山だったようです。二人で「人力車」にも乗りました。車夫が先生と私の娘と同年配、かわいい19歳の女子大学生だったのにびっくり。その方が研修中で英語の説明がまだ上手にできないからと、これまた大学生だという車夫さんが後ろを走りながら流暢な英語で観光案内をしてくれたのに更にびっくり。先生もびっくりしたり感心したりでしたが、一番びっくりされていたのは、私たちが車を降りて言問橋で曲がるまで、この二人の若い車夫さんがずっとずっと手を振ってくれていたことでした。プラパプン先生、本当に感激していらっしゃいました。私も感激したし、なんだか誇らしかったです。

午後は下総精神医療センターにて平井愼二先生に病棟をご案内いただき、条件反射制御法についてご講義していただきました。さすが神経科学が専門のプラパプン先生、理解の速いこと、質問の的確なこと。日本オリジナルの革新的な治療法を紹介できたのは意義深かったと思います。その夜は近藤代表と一緒に、日本料理をご堪能いただきました。

浅草観光にて

翌日は再び関西に戻られ、20日には龍谷大学犯罪学研究センター主催公開研究会にて、「タイにおける薬物問題と回復支援～ほほえみの国の回復支援」と題する講演をしていただきました。龍谷大学学長室を表敬訪問し、学長ともご懇談いただき、非常に意義深い交流ができたのではないかとアパリ、DARS一同喜んでいます。

マヒドン大学のプラパプン先生の修士コースには、猪浦智史さんという日本人学生が在籍しておいでです。私たちはタイDARSで、猪浦さんに本当にお世話になったのです。アジャン（タイ語で先生）とご家族に日本を楽しんでいただきたい、という猪浦さんの真心に打たれ、急遽オールAPARI、オールDARSで結成したプラパプン先生御一行様歓迎特別協力隊でした。忙しかったけど、楽しんでいただけたかな、ご満足いただけたでしょうか。猪浦さんは最終の二日間、アジャンとご家族を郷里である新潟県へスキーにご案内されたそうです。毎日35度越えのタイからのお客様を桜と雪で歓待できた、嬉しい一週間でした。



4/20　龍谷大学の研究会にて

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

家族教室参加者からのメッセージ

「家族教室に通って」

奈良（仮名）

彼が生まれた日のことを、今でも昨日のように憶えています。青い空に入道雲がどっしりと立ち上がった夏の日、息子は私達の長男として生を受けました。みどり児の大きな産声と小さな手をどれだけ愛おしく思ったことでしょう。あらゆる事に感謝した日でもありました。

彼は、大人しい穏やかな幼少期を経て成長していきました。しかし、思春期を迎える頃より、その生活は一変していきます。問題行動が多くなり、学校からの呼び出しも増えていきました。それでも私達夫婦は、一過性の反抗期と自分自身をなだめ、いつかは落ち着くものと考えていました。

そんな生活を続けていたある年、息子の友人が薬物使用で逮捕されたのです。息子にも薬物使用の疑いがある事を、知人から初めて聞かされました。その時の悲しみと絶望感は、一言では言い表せない程深いものでした。誰に相談する事もできず、唯一、ネット検索した「薬物」の情報は、あまりにも残酷なものでした。愛情不足だったかもしれない、育て方が悪かったのでは、母親としての自己を責めながら、猛省しても変わらない日々。

息子の行動に振り回された私達は、精神的にも経済的にも、又社会的な立場からも追い詰められていきました。息子自身も生活の場所を失い、その地を離れることを余儀なくされました。そして行方がわからなくなりました。

どうしようもできない現実と消息のわからない息子を思い、精神状態は限界にきていました。

昨年、彼が逮捕された時、あまり驚かなかったのは、「やはりそうであったか」という思いと小さな安堵感があったからかもしれません。

この事を機に、「薬物」についてではなく、「薬物依存治療」について調べる事になります。すると、薬物依存という病気がある事、息子も苦しんでいる事、家族がその病気を理解し前向きに生きる事、何より薬物依存は回復できるという事、を知るのです。長い長い闇のトンネルに小さな光が差し込んだ瞬間でした。同時に、薬物依存について学ぶ「家族会」の存在も知ります。

息子の逮捕で、これからずっと相談できる場所が欲しかった私は、アパリの司法サポートプログラムとアパリの家族教室に通う事に決めました。

地方に住んでいる私は、曙橋にあるアパリ家族教室まで、往復6時間かかります。義母の介護と仕事をしながらの通いは、当初難しいのではないかと思いました。しかし、初めて行った家族教室で、今、私自身が一番必要である場所が、この家族教室であることを知ります。

今まであった出来事を隠さずに話ができる。心の悲しみと苦しみ、不安、後悔をすべて話すことができる。同じ悩みを共有できる場所がここにありました。毎日、毎日、不安の中にいた私にとって、それぞれの家族の話は、時に涙、時に勇気、時に笑い、そして希望を与えてくれます。アパリスタッフの志立さんや当事者であるスタッフの方々、支援してくださる弁護士の先生。薬物依存に関する専門の学びは、とても新鮮で恐れと不安を一つ一つ取り除いてくれます。

「もう一人で悩まなくてもいい。」　はじめて感じた事でした。

私の横には、助けて下さる多くの方々がいる事。涙してくれる仲間がいる事。その事が私にもう一度生きる勇気を与えてくれました。

昨年夏、家族教室でセミナーがあり、1泊2日で軽井沢に行きました。その時、苦しい胸の内を涙ながらに話させて頂きました。その夜、窓の外の大自然を眺めながら、久しぶりにゆっくりと眠る事ができました。翌朝の朝食が美味しかった事。人はどんなに苦しくても生きていかなければなりません。涙ばかりの人生はあまりにも悲しい。自分自身を大切に思えた朝でした。

家族教室に通い始めて7月で1年となります。息子はまだまだ不安定な日々を送っていますが、私自身は少しずつ変えられ、平穏な日々を取り戻しています。それは、同じ悩みを持つ仲間（家族）がいる事。専門のスタッフの支えがある事。それ故、「一人ではない」と知った事が一番大きい事です。

学びの中で、薬物依存は本人の問題であり、家族にはどうしようもできない事。自分自身の生活を取り戻し、みつめ直す事。息子の回復を信じる事。そして自分自身の人生を楽しむ事。

まだまだ、心から人生を楽しむことができないでいますが、家族教室の方々と一緒に、泣きながら笑いながら、心温かい意味深い人生を歩んで行けたらと思います。

作家の曽野綾子さんが常々言っていました。

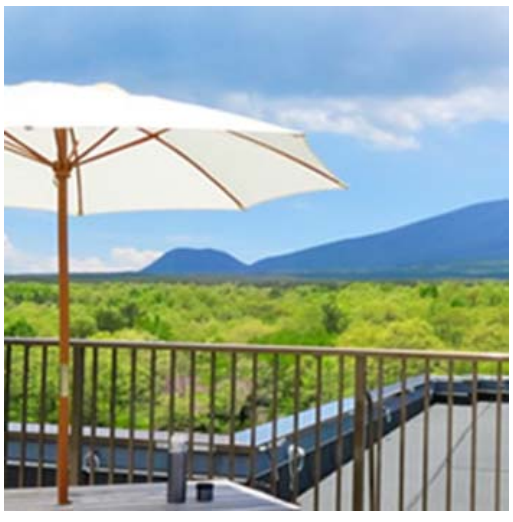
「幸福を感じる能力は、不幸の中でしか養われない。

苦労をしらないと、すべてが当たり前で、少しも幸福感に結びつかない。」

きっと、この家族教室に通う心優しい人達は、「家族の幸福」が何であるかを、一番知っている人達なのです。

第2回　軽井沢ワークショップのお知らせ！！

昨年に引き続き北軽井沢の高原で「家族のためのヒーリング＆シェアリング」を開催します。日程：8月21日(月)～22(火)
場所：軽井沢倶楽部 ホテル軽井沢1130
住所：〒377-1402 群馬県吾妻郡嬬恋村鎌原1453-2
定員：14名
宿泊参加費：3万円（2食付き、交通費は別途必要）
対象：日頃から家族教室に参加されている方
申込締め切り：6月30日
詳しくはアパリ志立までお問合せください。



藤岡ダルク　入寮者からのメッセージ

NPO法人アパリは、群馬県藤岡市にある藤岡ダルクを運営しています。同施設の入寮者からのメッセージをお届けします！

「仲間の名刺」

コウジ

依存症のコウジです。

17年前は贅沢に過ごせるだけの金銭をパチスロ店で稼ぐ方法があった。金にはなるが毎日開店から閉店までうち続ける行為に心身共に疲れきっていた。先輩から譲ってもらった覚醒剤を生まれて始めて使った。テンションがあがり、疲れ、眠けを感じなくなった。薬を使ってパチスロ店で金を稼ぐ生活に満足していた。規制が入りパチスロ店で金銭を稼ぐことができなくなった。

先輩からの誘いでヘルス店の仕事に就いてから３年後店長として働いていた。店長になって売上をあげるという使命感ができた。当店の女性からサービスを受けるため来店する客、繁華街を歩いている客はいずれもテンションが高い。こちら側が客のテンションに合わせることで接客、客引きの効率が上がることは数年間の経験を経て学んでいたが、終始合わせ続けることができなかった。疲れと調子が悪いときは尚更だった。またサービスを行う女性達が毎日同じ顔ぶれでは客は店に飽きてしまう。そのため店に新人を入店させていた。募集広告をうたず路上スカウトで新人を集めた。毎日50人以上の女性に声をかけ続けた。

多忙な業務で睡眠不足が続いた。これらに関する問題を乗り越える為にハードドラックを使った。薬を使って業務をこなしては売上げが上がり歩合を手に入れた。この調子で薬を使っていけばもっと売上を上げる自信があった。しかし、スカウトを通じて知り合った多数の女性とセックスするようになってから薬の使用目的が変わった。また、店の女性に手をつけた事がオーナーにばれてしまい、一発で信用を失った。それでも薬を選びそれより本当に大切な人を傷つけてきた。

覚醒剤使用で逮捕され服役し、およそ3年間を塀の中で過ごし、出所した日に薬を使った。再び逮捕され地元から遠く離れた網走刑務所に収監された。およそ２年間を塀の中で過ごしては出所した。知り合いがいない土地で薬を手に入れるため札幌市のススキノへ行き、客引きの連中に声をかけたがこの日は薬を使うことができなかった。ススキノにいれば薬を手にすることができると思い、客引きに加わった。客引きの面倒をみている人間と出会ってからは話が早かった。客引きで金を稼ぎ、薬を使い、数日間遊んでは客引きで金を稼ぐと云う繰り返しの日々が数ヶ月続いた。

またまた逮捕され服役し、親から勘当する旨の手紙が届いた。思わぬ離縁に衝撃を受けた。ここで薬をやめれば親子関係を取り戻せると思い、薬を断つ決心をして出所した。数年間塀の中で自由を制限されていた生活を終えては様々な欲求が出た。食欲、物欲に走った後、性欲と同時に薬の欲求が出た。自身に薬をやめなければと云い聞かせていたが薬を使い性欲を満たした。

今回も欲求どおりに薬を使ったが、いつものように満足感に浸ることができなかった。親から勘当されたことが頭にあった。薬を使った罪悪感から逃げるため追い打ちをした。いつも以上の量を入れおかしくなった。

４度目の逮捕で自分の意志ではやめることができないことを知ったとき「どうしよう」と焦った。弁護士が「拘置所のたんぽぽ」と云う題名の本を差し入れしてくれた。内容の箇所に記載されている仲間の人生を読み進めては偶然にも家族構成、薬の入手方法、思考等が私の人生と合致していた。ダルクに興味を持つきっかけになった出来事だった。

刑務所内で開催されているシャブ教に参加し、ダルクの方達とミーティングをした。5年、10年間薬をやめ続けているダルクの方達が「明日使うかもしれない、いつ使うかわからない、でも今日はやめとこう、今日だけ使わないでいよう、それを続けている」と話してくれた。ダルクには自分の知らないやめ方があることを知った。他囚人達は仮釈をもらうため、やめる気になればいつでもやめられると云う感覚でシャブ教に参加していた。同囚が居る手前「薬をやめることができないので助けてください」という自身の本音をダルクの方達に伝えることができなかった。場所柄、囚人達の前では体裁を作っていた。

多数の囚人と知り合う中で、私と同じく薬をやめれないという共通点をもつ者が数名いた。それらの連中と多くの時間を過ごしては娑婆で再会する約束を交わし、それぞれ出所した。

出所してから一月後に元囚人と自宅で再会した。相手は薬を使っていたし薬を私に勧めた。断ったにもかかわらず、私の分の薬を手に入れるため、私を自宅に残して車で出掛けた。私は相手の帰宅を待たずに自宅を飛び出した。薬は使いたかったが娑婆での生活を大切にしたかった。だから薬を目の前に出される訳にはいかなかった。

「拘置所のタンポポ」が増刷されました！

拘置所のタンポポ
日本ダルク代表
近藤恒夫　著

■目次
プロローグ　のりピー、ダルクへおいでよ
第１章　絶頂からの転落～そして再起　わが波乱の半生
第２章　誰が、なぜ、ヤク中になるのか
第３章　あまりに知られていない覚せい剤の世界
第４章　なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
第５章　立ち直るためにはどうすればよいのか
第６章　新生した仲間たち

■発行：双葉社
価格：1,400円（税別）

※お買い求めの方は下記へFAXでお申込みください。
FAX：03-5312-7588
日本ダルク インテグレーションセンターまで

※住所、氏名、電話番号、ご希望数をご記入ください。

この時ダルクに助けてほしいと思った。逃げなければ薬を使ってしまう私の問題を相談したかった。

ダルクにつながる術がなく新宿警察署へ相談に行った。数年前に薬の使用で逮捕されたとき「薬を使う前に相談しにきなさい」と担当刑事に云われたことを覚えていた。入口で警備をしていた警察官に薬に関する相談がある旨を伝えたところ薬銃に案内された。取調べ室で数人の刑事相手に薬を断つにはダルクが必要なのだということを説明するのに時間がかかった。薬の効果、欲求、使用目的等を具体的に話した。ダルクにつながるためだと自身に云いきかせ尿検査に協力した。別の刑事から藤岡ダルクのスタッフの名刺のコピーを渡された。刑事から「薬の件で問題を抱えている相談者に対応するため畑さん（スタッフ）の名刺を持っていた」と聞かされた。警察署を出て藤岡ダルクへ電話をかけた。この日は日曜で電話に出るか不安だったがスタッフにつながった。薬から逃げてきたこと、警察署へ相談に行ったこと等藤岡ダルクへ電話するまでの経緯を話した。スタッフは薬を使わず逃げてきた行動を称えては、間髪入れず藤岡へ来るよう私の希望に沿うかたちをとってくれた。

どこの馬の骨かもわからない私のことを一切詮索しなかった。薬の欲求、食事、金銭等藤岡ダルクに到着するまで、ただただそれらを案じてくれた。藤岡ダルク最寄りの駅でスタッフと待ち合わせることになった。これから回復のために施設で生活することが不安だった。仲間とうまくつきあえるか、回復できるのか、刑務所慣れしているが関係なかった。

スタッフと駅で落ち合い車で施設へ向かった。車内で自身の人生を聞かせてくれ、薬無しでも楽しく生きられると励ましてくれた。笑顔には説得力があった。車内から施設の入口が見え大勢の入寮生が集まっていた。迫力があった。緊張した。うまく挨拶をしなければと気持ちを落ち着かせ施設内に入った。私よりも先に入寮生の方から挨拶してくれた。有り難かった。

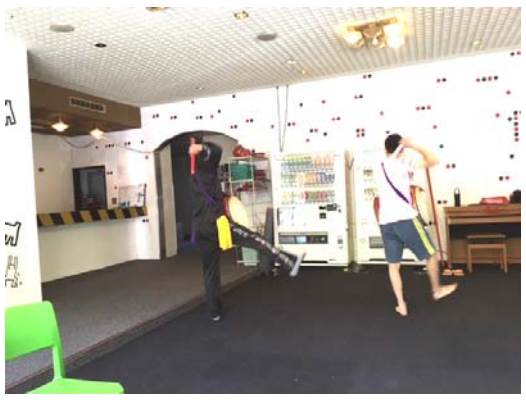
もし刑事が名刺を持っていなかったら、日曜日にスタッフが電話に出なかったら、仲間達に受け入れてもらえなかったら、おそらく自宅にもどり薬を使っていたと思う。こうした経緯からダルクにつながる願いが叶い現在に至る。

藤岡ダルクで日々体験している仲間達との共同生活、ステップ、NA等は回復する為、傷つけた人たちへの埋め合せが可能な行為だと信じている。施設長、スタッフは入寮生に対し藤岡ダルク独自のプログラムを提供している。入寮生同士で分ち合い、手を差し伸べる関係を作り上げている。私は回復に向けて安心できる環境で生活させて頂いている。

私は他人からどう思われているのかばかりに気をとられ、自身の主張をおさえては消極的な言動を選択してきた。いつの日か羊のように他人の意見や命令にしか動けなくなっていた。藤岡ダルクでは私が主張することができる機会を作ってくれる。十数年間変えることができなかった自身の問題にとらわれなくなってきた。

最後に、この様な機会をくれた仲間への配慮に感謝します。

入寮して2ヶ月
娑婆で迎える8年ぶりの誕生日
仲間からのお祝いに感動の様子



エイサーの練習をしているコウジさん（左）
夏にはデビューしたいと語る

第5回ソウルダルクフォーラムのご案内！！

日時：2017年6月24日（土）13:30～
場所：ソウル国際ユースホステル3階
ゲスト：近藤恒夫（アパリ理事長）、石塚伸一（龍谷大学・アパリ副理事長）

前日の23日(金)にはシンポジウムも開催予定。25日(日)には日韓合同で自助グループのワークショップも開催。また、26日(月)には麻薬退治運動本部主催の記念セレモニーもあります。23日～26日の4日間はソウルでイベントが目白押しです。お申し込みは不要ですので、興味のある方はソウルまで足を運んでみたらいかがでしょうか？

日本国内のお問い合わせ先
韓国ダルク日本オフィス：0532-52-8596

NO DRUGS 警視庁開催！

日時：2017年6月25日(日) 9:30～12:00

場所：警視庁本庁

6月26日は国連の国際麻薬乱用・不正取引防止デーです。
これにちなんで6月26日に近い日曜日に警視庁で開催しています。

※参加を希望される方はアパリまでお問合せください。

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

〇アパリ東京本部
〒162-0055
東京都新宿区余丁町14-4
AICﾋﾞﾙ１階
電話：03-5925-8848
FAX　：03-5925-8984
Email：info@apari.jp

〇藤岡ダルク
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX　：0274-28-0313
〇入寮費：月額13万円+生活費1日千円（初月のみ14.5万円）（税別）
＊生活保護の方も可能
〇入寮条件：薬物依存症から回復及び自立をしようとしている本人。男性のみ。
〇入寮期間：　個人により差があります。

〇木津川ダルク
〒619-0214
京都府木津川市木津内田山117番地
電話　：0774-51-6597
FAX　：0774-51-6597
〇入寮費　月額16万円
（初月のみ19万円）（税別）
＊生活保護の方も可能
〇入寮条件：薬物依存症から回復及び自立をしようとしている本人。男性のみ。
〇入寮期間：個人により差があります。

ホームページをぜひご覧ください。
http://www.apari.jp/npo/
Facebookもやっています！

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成29年5月1日発行
定価　１部　100円

＜司法サポートのご案内＞

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

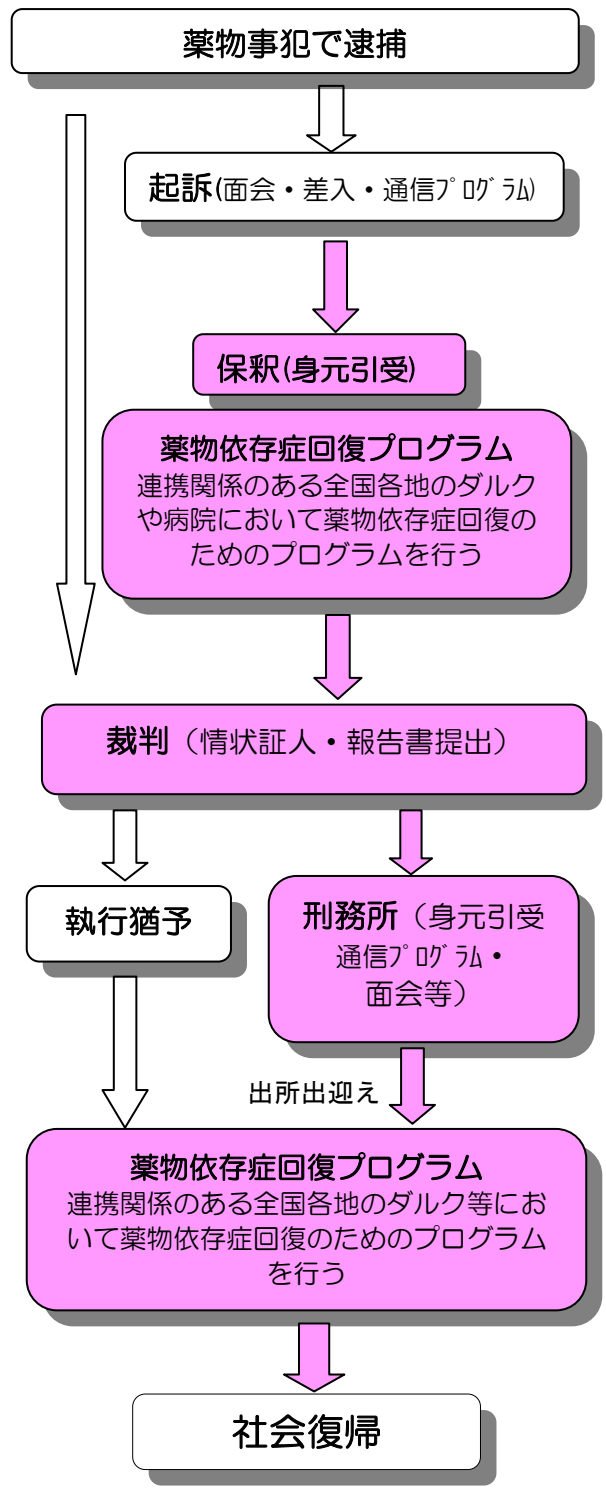
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚醒剤事犯の再犯者率は約65%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。 **裁判中のプログラムの提供、受刑中の身元引受、出所出迎えに行ってリハビリ施設に繋げるお手伝いをします。**

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方やクレプトマニアの方の司法サポートも行っています。（窃盗、横領、詐欺等）ご相談ください。

[費用：コーディネート契約料として一律20万円（税別）。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



＜アパリ家族教室スケジュール・東京＞

第1月曜	連続講座	第3月曜	アディクション関連講座
5/1(月)	第3回 依存症者の心にある2つの考え	5/15(月)	アディクション関連講座 「間違いに寄り添う！」 近藤　恒夫（理事長）
6/5(月)	第4回 本人・家族の心の成長−自立心・自尊心を伸ばす関わり	6/19(月)	「ワークショップ　家族のための12ステップ講座5」 笹瀬　健児氏(ﾘｰｶﾞﾙ・ｶｳﾝｾﾗｰｽﾞ)
7/3(月)	第5回 気持ちの回復：家族自身の気持ちと本人の気持ちの両方を大事にする	7/17(月祝)	「ワークショップ　家族のための12ステップ講座6・7」 笹瀬　健児氏(ﾘｰｶﾞﾙ・ｶｳﾝｾﾗｰｽﾞ)
8/7(月)	第6回 子どもの成長を助ける関わりについて	8/21～22	宿泊型ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ「家族のための12ステップ講座　ｽﾃｯﾌﾟ8・9」In 軽井沢
9/4(月)	第7回 薬物問題を持つ人の家族の回復プログラム	9/18(月・祝)	「ワークショップ　家族のための12ステップ講座10」 笹瀬　健児氏(ﾘｰｶﾞﾙ・ｶｳﾝｾﾗｰｽﾞ)

【対象】
〇連続講座（全8回）は家族のみが参加可能で、どの回からも参加できます。
〇アディクション関連講座はどなたでも参加できます。
【時間】18:30～20:30　【場所】アパリ・インテグレーション・センター　１階会議室
【参加費】3,000円（2名以上の場合は4,000円）　【申し込み】不要